

25. いつ起きるかわからないのに・・・

自然災害は突発的に発生し、発生した時には大きな被害が出るということは経験的に分かってはいますが、それに対してどう備えるのかという完全防衛はありません。その上、そのようなことにかかわっている日常でないと思っている人も多いと思います。防災や減災は大事だといっても、その備えは保険であると思っていたり、何かあれば行政が対応するものだからあるいは発生すれば何とかなるし、これまでも何とかやってきたといわれる人もいます。しかし、安心して安全に暮らすということは誰もが望んでいることだし、生活の基本です。災害が発生した時には、何とかその被害を最小化して犠牲者が出ないようにすることは、災害への対応として必要なことです。しかし、大きな災害を経験しても、復興してくると多くの人の災害の恐ろしさも徐々に風化始めるというのが一般的なことです。

ところで、いくら知識を詰め込んだところで、防災へつながるということにはならないわけで、それをどう生かすのか、逆に応用できるような方法での知識の習得が必要になるということになります。

それには切り口が大事なところで、たとえば、学校教育などで防災というテーマではなく地域学習のようなことで触れていくというような脇役的にあつかつて、身近なこととして考えることもあります。あるいは、他の地域で起きたことをわがことにして調べるようなことがあってもよいと思います。地域でも地域知を歴史的に扱うというような切り口があるのかもしれませんが。防災は重要なことではありますが、それを脇役というか刺身のツマのように感じてなじんでもらうことも必要だと感じます。つまり、興味や関心のあるところから、暮らしている自然環境を知って、そこにあるリスクを知り、どうすればそれをかわすことができるのか考えます。

そして、様々な面から情報を共有しておくことや災害履歴などを継承していくということは、この列島に暮らす限りは大切なことであるという意識を身につけることだと思います。そうすれば、国内外で発生したことを、対岸の火事と思わずに関心を継続させるようになればと思います。

そういうことで、実際にNPO活動で防災・減災の活動をしている中で、いかに自然災害へ関心を持ってもらうのかということが課題になります。一方的に知識の切り売りになっていないか、提供側の自己満足になっていないか気になっています。

防災・減災の活動の目的は、いかにして災害時の被害をなくし犠牲者を生まないかということです。しかし、相手に関心を持つ、あるいは持つように相手の関心に入っていないと絶対に伝わらないわけですが、難しさも感じています。自然災害は、この日本列島に暮らす限りは避けられないものだという事、災害は無駄な出費と精神的なダメージを受けること、暮らし方で減災ができることを伝えていきたいと考えています。